

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02102

研究課題名(和文) 自然・人工・芸術のあいだ 環境芸術にもとづく自然環境美学の企て

研究課題名(英文) Between Nature and Art-Study for Aesthetics of Natural Environment Based on Environmental Art-

研究代表者

伊東 多佳子 (ITO, TAKAKO)

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：00300111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英米の環境芸術の実証研究に基づく新しい自然環境美学の構築の試みである。ここで構築される自然環境美学は、西洋哲学の伝統において「自然」対「人工」(ないし「芸術」)の二項対立の図式で捉えられてきた「自然」「人工」「芸術」の概念を定義し直し、同時にこれら3つの領域を自由に行き交う英米の環境芸術作品の美学的な分析を通して、現代の複雑な自然環境を明らかにする。研究の成果として『美学』に発表した論文「環境芸術は自然に対する美的侮辱といえるのか 環境芸術をめぐる倫理的問題について」では、環境美学の最新の議論の動向を示しながら環境芸術をめぐる環境美学の新たな方向を示すことになった。

研究成果の概要(英文)：This study tries to establish a new aesthetics of natural environment based on empirical research of British and American environmental art. It is to redefine three concept, 'nature', 'artifact' and 'art' captured by the scheme of dichotomy of nature and art, and to clarify contemporary complicated natural environment through the aesthetic analysis of anglo environmental art which crosses the border among art, artifact and nature freely. As a result, I published a paper, "Debating Ethical Issues Surrounding Environmental Art - On 'Is Environmental Art an Aesthetic Affront to Nature?' - " to show a new direction of study for environmental aesthetics on environmental art.

研究分野：美学

キーワード：環境美学 環境芸術 美学 芸術学

1. 研究開始当初の背景

20世紀後半に生じた環境美学はその重要性が認識されながらも、国内では研究書はきわめて少ない(西村清和『プラスチックの木で何が悪いのか』(2011年))。英米では「関与の美学」(A・バーリアント)「科学的知識に基づく自然を扱う美学」(A・カールソン)、独では「雰囲気の美学」(G・ベーム)「日常性の美学」(W・ヴェルシュ)の研究があるが、既存の自然美学の図式を排除し、主観性を極端に嫌うために美学の方法論を逸脱し、「環境」概念の外延が広いために対象を日常のあらゆるものに広げることになり、具体的な美的経験を無効にしてしまう傾向がある。また、自然観照を芸術観照とパラレルな経験として論じることに腐心するあまり、正当性の根拠を科学に求める無理も生じている。国内では、自然の美的経験をダントーの「芸術-界」にならった文化概念としての「自然-界」(西村清和)という概念領域から論じる試みがある。

本研究の目指す環境美学は、その出自からも要請される自然環境の美学であり、この「環境美学」は、加速度を増す自然環境の悪化の中で、いままさに最重要課題となった人間の自然への向き合い方、すなわち人間と自然との新たな関係を模索するための指針となる新たな自然哲学として構想される。環境芸術の美学的な分析をもとに、環境美学の中で排除されてきた主観性を否定することなく、「自然の美的経験」を芸術の形式の中で検討することによって、しかも芸術観照モデルと併置される自然観照モデルを示すのではなく、自然-人工-芸術の交差および相互浸透の実情を明らかにしながら、従来の自然概念とは異なる現代の自然環境の定義を新たな環境美学の中で試みるものである。

これまでわたしは、人間と自然の新たな関係を模索するために、環境芸術を手がかりにした環境美学を構築することに一貫して取り組んできた。というのも、環境芸術は現代芸術の中でも人間と自然の関係をもっとも直接的に反映している芸術であり、現代の自然環境に対する反応が明確に表現されているからである。本研究の先行研究となる平成22-24年度科学研究費基盤研究(C)「自然の歴史化—環境芸術における narrative なもの—」における環境芸術の考察の中で、最新の環境芸術作品に表現され、作品を文字通り取り巻く自然環境が、従来の哲学の文脈で捉えられてきた「循環する永遠の自然」ではなく、自然環境の悪

化に伴い「死すべき存在」として物語られる「歴史化する自然」であることを指摘した。近年の環境芸術の試みは、「自然」対「人間」ないし「自然」対「人工」という単純な二項対立を超えて、科学技術を用いて生態系を健全な状態に戻そうとするものが多い。そこに表現される自然は、伝統的な西洋哲学の自然観ではもはや捉えきれないまさに現代のきわめて複雑な自然である。本研究は、この延長線上に、「自然」と「人工/芸術」という、きわめて多様で複雑な意味を持つ曖昧な概念を、自然と人工ないし芸術のあいだに位置する環境芸術の考察を通じて明らかにしながら、新たな自然概念に基づく環境美学を構築しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究において、現代の自然環境を強く映し出す環境芸術の現状を、歴史的な背景とともに明らかにしながら、「自然」-「人工/芸術」という二項対立を精査することで、守るべき自然の行方を見据えつつ、人間の自然に「関する」責任と、現代の自然環境がなおもちうる内在的な価値を明らかにする環境美学を構築する。

まず、一般に行われているように環境芸術を芸術運動の一様式として美術史的に捉えるのではなく、自然環境を主題にする環境芸術を美学的に分析し記述する。というのもそれらが扱う現代の自然環境が、従来の哲学の文脈で捉えられる「自然」の概念をはるかに超え出た複雑さを持つため、伝統的な「自然」対「人工」ないし「自然」対「芸術」という二項対立の思考モデルが十分に機能しないからである。しかしそれは現代の自然環境がなおもちうる内在的な価値を示してもいる。環境芸術を通して「自然」「人工」「芸術」の概念を精査することは、とりもなおさず古代ギリシア以来、芸術を論じる際に避けて通れない美学の根本問題、すなわちピュシス(自然)とテクネー(技術ないし芸術)の問題をも同時に現代的な自然環境の観点から解明することを目指すものとなる。

また、現代の自然環境を論じる際に、環境倫理学および保全生態学が提示する自然観に基礎を置く。きわめて深刻な生態系の危機に直面している現実において、未曾有の速度と規模で現在も進行している環境の悪化は、自然がもはやもはや循環し調和の中で秩序が保たれる存在ではなく、死すべき運命の中で歴史性を持つ人間と同じように不可逆的で歴史的時間性を持つ存在であることを示しているからである。

閉塞状況を進む現代芸術の中であって、近年の環境芸術作品は、長い時間をかけて捨象したはずの「歴史」や「物語」を作品

に取り込もうとする傾向が強くなっている。このことは対象とする自然が、永遠に循環するものではなく、歴史性を持ち始めたことを意味している。この傾向についてのさらなる検討は、芸術の自然との関わりのみならず、芸術の定義に関わる問題や、モニュメント、記憶といった、優れて美学的な問題を明らかにしていく点でも有効だと考えられる。自然を対象にして芸術行為を行う環境芸術は、すでにして矛盾を孕んだ存在であるが、それは必ず「自然とは何か」ないし「芸術とは何か」という美学においても本質的な問いに正面から向き合うものとなる。

これまでに行ってきた英国の環境芸術の美学的分析の蓄積を基にした今回の研究によって、申請者の環境美学構想は確実に進展し、現代の自然環境の現実と乖離しない環境美学の構築が可能になる。本研究の成果は、申請者の長年の環境芸術および環境美学の研究の総まとめとなるものであり、環境芸術を基礎に据えた環境美学研究というユニークな研究の重要な部分を構成することになるとともに、現代の自然環境を明らかにし、今後の人間の自然に対する関係について美学の方法論からアプローチする画期的なものになり、今後の環境美学の方向を指し示すものになると考えられる。

3. 研究の方法

英国の環境芸術研究を中心に据えた自然環境美学の構築をめざす本研究にとって、なによりも重要なのは自然環境を主題とする英国の環境芸術の美学的な分析である。そのため3年を通じて 実地野外調査を中心とした環境芸術の個別の実証研究と 環境美学と環境倫理学の理論研究という二本の柱に沿って実施される。 については環境芸術の文献資料および映像資料の収集・精読と同時に、英国各地にある環境芸術作品の実地野外調査を行う については、ロマン主義をはじめとした自然哲学ないし関連する美学・芸術学、環境倫理学、環境哲学、保全生態学、および環境美学の研究が中心となるため、おもに文献資料の収集とその精読が必要となる。

初年度である平成 27 年度は、英国の環境芸術作品の実地野外調査を中心に計画を実施した。とりわけ、英国の5カ所を選んで彫刻を設置したにアントニー・ゴームリの《ランド》プロジェクトを中心に、デイヴィッド・ナッシュの《トネリコのドーム》およびアンディ・ゴールズワージーの《ストライディング・アーチズ》、《クローガ・パイク・チェンバース》、《ペンポント・ケアン》の調査を行った。あわせて、環境美学と環境倫理学の理論研究は専門書の精確な読解を通じて、とくに風景と環境について考察を深めた。

研究の2年目にあたる平成 28 年度は、初年度の研究成果をふまえて、さらに英国の環境芸術に関わる理解を深め、その現状を認識するためにふたたび実地野外調査を行った。とりわけ、変貌する現代の自然環境を主題にすることで自然の歴史性と風景の物語性を表現しながら、自然、人工、芸術のあいだに位置する環境芸術作品の十全な分析のためには、環境芸術を取り巻く環境、すなわちその地域の特殊な事情の中で、いかに自然と人間の共生という理念を実現し、経年変化の中で、どのようにその役割を果たしてきたかについて、なによりも現地で環境そのものを含めて体験・思索する必要がある。そのため初年度同様に、9月に英国国内の環境芸術の調査を行った。実施箇所は、デイヴィッド・ナッシュ《トネリコのドーム》およびアンディ・ゴールズワージー《ストライディング・アーチズ》《ペンポント・ケアン》《タッチストーン・ノース》、ヨークシャー・スカルプチャー・パークである。また、環境芸術の実証研究の過程で環境芸術に関する研究書をまとめるために必要不可欠であるアメリカ合衆国の環境芸術作品の実地野外調査を、6月の夏至（理想的な状態での調査のため）の前後の期間に行った。実施箇所はマイケル・ハイザーの《ダブル・ネガティブ》、ロバート・スミッソンの《スパイラル・ジェットイ》、ナンシー・ホルト《サン・トンネルズ》、ウォルター・デ・マリア《ライトニング・フィールド》である。これらの充実した実地野外調査にくわえて、環境美学と環境倫理学の理論研究を専門書の精確な読解を通じて行うことで、風景と環境についての考察をより深めることができた。また、前年度の成果の一部を「「ここではないどこか」ではない「いま、ここ」へーアントニー・ゴームリ - の《別の場所》と《ランド》プロジェクトをめぐって一」『GEIBUN011 富山大学芸術文化学部紀要第 11 巻』82-92 頁に発表した。

最終年度にあたる平成 29 年度は、研究の総まとめとして、前年度までに行った詳細な実地野外調査および分析による英国および米国の環境芸術の実証研究と、自然に関する美学および倫理学の理論研究によって得られた研究成果を、新たな自然環境美学の論文としてまとめる。本研究の到達点は、変貌する現代の自然環境の経験を倫理的・美的に分析し記述するための具体的な方法を指し示すことである。そのために、英国の環境芸術について、そこに表現された現代の自然環境が顕わにする、「自然」対「人工」および「自然」対「芸術」の二項対立の本質的な問題点を明らかにするとともに、過去から現代に至る自然観の変遷と、わたしたち人間の自然に対する態度の変化を浮かび上がらせる。現実的には自然概念はきわめて曖昧で扱いにくく、また芸術概念も

あまりに外延が広すぎるため定義不可能で
すらあるが、「自然」と「芸術」という誰も
が自明のこととして通り過ぎるこの二つの
概念に真剣に向き合い、両者の新たな定義
を試みたい。こうした作業を経てわたした
ち人間はこれまでどのように自然に対して
きたのか、そして今後わたしたち人間が向
かうべき自然に対する態度について、そし
てわたしたちが守るべき自然とはいったい
どういうものなのかについて、美学本来の
主題である芸術と自然に関して、人工と自
然の問題から考察することで、丁寧に捉え
直しながら、現代の地球環境をめぐる現実
と乖離することのない自然概念を提示する
ことが本研究の最終的な目標となる。

4. 研究成果

本研究は英米の環境芸術の実証研究に基
づく新しい自然環境美学の構築の試みとな
るものである。本研究で構築される自然環
境美学は、西洋哲学の伝統において「自然」
対「人工」(ないし「芸術」)の二項対立の
図式で捉えられてきた3つの概念、「自然」
、「人工」、「芸術」を定義し直すものであ
る。同時にそれは、「自然」、「人工」
、「芸術」の3つの領域を自由に行き交う英
米の環境芸術作品の美学的な分析を通して、
これら概念の境界と相互浸透もしくは相互
侵犯の事態を精査し明らかにしながら、現
代の複雑な自然の現実と乖離することのな
い新たな自然概念を提示するものとなり、
最終的には自然の美的/倫理的な考察方法
として構築される。最終的には、研究の総
まとめとして、前年度までに実施した海外
実地調査をふまえて、環境芸術の実証研究
に基づく自然環境美学の考察を以下の論文
にまとめた。「革命の後、月曜の朝に誰が
ゴミを拾いに行くのか? ミアレ・レイ
ダーマン・ユケレースの《ランディング》
をめぐって」『GEIBUN 012 富山大学芸術
文化学部紀要第十二巻』86~97頁、およ
び、「環境芸術は自然に対する美的侮辱と
いえるのか 環境芸術をめぐる倫理的問
題について」『美学』美学会編第69巻第
1号(252号)49~60頁(掲載予定)。なお、
「環境芸術は自然に対する美的侮辱とい
えるのか 環境芸術をめぐる倫理的問
題について」は、10月に國學院大學で開
催された第六十八回美学会全国大会で、本
研究の成果として発表した「環境芸術は自
然に対する美的侮辱か」に基づき加筆したも
のである。環境美学の最新の議論の動向を
示しながら環境芸術をめぐる環境美学の
新たな方向を示した本発表は相当の反響を
呼び、環境美学の発展に一定の貢献をする
ことができた。

今後この研究成果をもとに環境芸術の実
証研究に基づく自然環境美学研究をさら
に発展させ、著書としてまとめたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

伊東多佳子 「ここではないどこか」で
はない「いま、ここへ」 アントニー・
ゴームリーの《別の場所》と《ランド》
プロジェクトをめぐって GEIBUN011
富山大学芸術文化学部紀要第11巻、査読
有、第11巻、2017、82-92、
<http://www.tad.u-toyama.ac.jp/outline/research/pdf/bulletin11/p82-92.pdf>

伊東多佳子 革命の後、月曜の朝に誰
がゴミを拾いに行くのか? —ミア
レ・レイダーマン・ユケレースの《ラン
ディング》をめぐって— GEIBUN012
富山大学芸術文化学部紀要第12巻、査読
有、第12巻、2018、86-97、
<http://www.tad.u-toyama.ac.jp/outline/research/pdf/bulletin12/p86-97.pdf>

伊東多佳子 環境芸術は自然に対する
美的侮辱といえるのか 環境芸術をめ
ぐる倫理的問題について 美学
49-60.

〔学会発表〕(計1件)

伊東多佳子 環境芸術は自然に対する
美的侮辱か 環境芸術をめぐる倫理的
問題について 第六十八回美学会全
国大会 2017年(於: 國學院大學)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊東多佳子 (ITOH TAKAKO)

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号: 00300111

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし